学校教育実践コース（国語教育専修），書論、鑑賞

北京で書道研修

学外非常勤講師・樋口将一

1. 授業の概要

本授業は、中華人民共和国北京市、天津市にて集中講義として行った。期間は 2007 年 12 月 15 日から 19 日までの５日間である。受講生は教育学部学校教育教員養成課程国語教育専修、国際理解教育コース３回生と４回生の５名であった。

授業は北京､天津の博物館などを訪問し、書道、文字に関係する文物を鑑賞しながら解説を行った｡受講生には集中講義期間中、毎日小レポートの提出を求めた。さらに帰国後事後レポートの提出を求めた。

成績評価は、現地での学習態度と事後レポートによって評価した。

2. 授業の目的・目標

本授業の目的は、書法文化を理解することである。具体的には以下の２点に重点を置いた。1).中国での体験活動を通して、文字に関する歴史・文化に触れる。2).甲骨、青銅器などの文字資料､書画作品を実見し、それらの文化背景を含めて鑑賞する。

到達目標として、以下の３点をあげた。1).文字・書体の発展を体系的に説明できる。2).文化における書道の位置づけ、あり方を説明できる。3).作品鑑賞を実体験として説明できる。

3.授業の準備

昨年度までの反省点として、受講生の体力的負担があげられる。海外での集中講義のため終盤になるほど体力的にきつくなるようであった。今回は訪問先を減らし、移動を少なくした。鑑賞する文物の数は減少したが、その分、訪問先で十分に時間をとることができ、より内容の濃い鑑賞、解説を行うことができた。

また、昨年度、北京市は 2008 年にオリンピック開催を控え、関連工事の真っ最中であり、博物館の改修工事など授業に大きな影響を与えるものもあるため、事前に十分な現地情報の収集が不可欠であることをあげた。博物館の改修工事以外にも授業の内容が博物館の展示内容に左右されるため、今回は事前に十分な下見と下調べを行った。博物館の展示内容を十分に授業に活かすために授業の方向性を考え、いくつかのテーマを決めて授業を行うこととした。テーマに沿って概説から各論へと進み、受講生が興味、理解しやすいよう日程を組んだ。そのため、時間の都合からシラバスで示した内容のうち、採拓実習を行うことができなかった。

授業資料として、受講生が事前に用意した資料のほかに博物館の展示内容に沿った解説プリントを用意し授業中に配布した。

4.授業について

北京市内での移動は主に地下鉄と路線バスを使った。プリペイドカードを購入し、市民生活の一端を体験できよう考慮した。受講生も駅やバス停で見かける風景に大変興味を示しており、よかったと思う。公共交通設備を用いた移動の一番の長所は受講生が訪れた場所の位置を理解しやすいことである。特に北京市はもともと五行思想に基づいて都市が設計されており、歴史建築物の解説の際に東西南北の方向の理解がとても重要だ。地下鉄、バスを利用することによって受講生が位置関係を把握しやすく、授業内容の理解にとても役立った。

天津へは北京駅から列車で移動した。授業の内容とは直接関係はないが、外国で列車に乗って移動するというのはほとんどの受講生にとって初めての経験であり、中国に対する興味付けとしておおいに意味があった。

以下、主な訪問先と授業内容を記す。

1).天津博物館：精品庁において中国画、甲骨文、金文、王羲之の書と双鈎填墨などについて実物を鑑賞しながら解説を行った。受講生たちは一つ一つの展示品に感嘆の声を漏らしながら見入っていた。細かさや迫力といった印刷物では伝わりにくい点を体感できることも大きいが、解説によっていろいろな視点から鑑賞することがで

き、とても充実した体験ができたと思う。
書法庁では時代順に展示品を見ながら文字、書体の変遷と書道史の発展について解説を行った。展示品の解説にとどまらず、書法発展のポイント、書法理論の変遷を交えながら解説を行った。
絵画庁では詩、書、画、文人をキーワードに中国の書画文化について解説を行った。時間の都合もあり十分に時間をとることができなかったが、精品庁、書法庁と併せて翌日以降の授業につながる興味付けは十分にできたと思う。
2).故宮博物院：いくつかの主立った建物が修復中のため参観できなかった（事前に把握済み）。石鼓館で石鼓の鑑賞を中心に授業を行った。天津博物館での文字変遷の解説を補足する形で秦の文字統一について展示パネルを参考に解説した。その際、天津博物館での授業とつながりが感じられるよう配慮した。
また、本授業の主要な目的の一つである書法の文化背景を理解するため、宮中での書画収蔵文化について解説し、三希堂と刻帖の原石を参観した。受講生も天津博物館で鑑賞した文物が紫禁城に収蔵されていた当時の状況を想像することができたようであった。
3).首都博物館：青銅器、文房と文房具、明清帖学派の書を中心に鑑賞、解説を行った。ここでも天津博物館と故宮博物院で解説した内容と関連を持たせるように努めた。
そのほか、琉璃廠や北海公園内三希堂法帖などを見学した。

5.レポートについて

期間中、毎朝前日の内容に関する小レポートの提出を求めた。夜ホテルに戻ってからの作業であり、受講生にとっては負担であったようだ。しかし、短い期間で多くの物事を見ていくので、どうしてもひとつの体験に別の体験が覆い隠されたり、混同したりしてしまう傾向がある。小レポートは一日の内容を整理するよい機会となっていた。また、提出された小レポートの内容をできる限り授業に反映するよう心がけ、小レポートの内容をふまえて受講生と個別に相談し、事後レポートのテーマを決定した。
事後レポートは帰国後一週間を締め切りとしての提出を求めた。参考書籍などは集中講義期間中に指示した。学外非常勤のため電子メールを通じて受講生と連絡を取り、レポートの添削を行った。提出されたレポートは、改善点を指摘して全員に再提出を求めた。
昨年度までのレポートはすべて公開しており、今回の受講生も昨年度までの受講生のレポートを読んでいる。受講生も公開されることを前提に書いているので、とても読みやすく書かれていた。文責を負うという観点からもレポートの公開はよい効果を生んでいると思う。

6.授業の感想、達成

受講生の授業後の感想を読むと、実際に自分たちの目で中国文化、書道文化を見られたこと体験できたことに大きな喜びを感じているようだった。
また、書道の中でも受講生それぞれが異なる分野に興味を持ち、滞在中、その興味を柱に自ら進んで学習している姿が見られた。その現地での興味と学習態度が帰国後のレポートにつながっており、とても頼もしく感じられた。
受講生の反応を見ていると、印刷物やスライドではなく、実物を鑑賞することの大切かがよくわかる。授業前に、受講生が興味を持ちそうな内容をある程度予想しているのだが、その予想を超えて受講生はいろいろなものに興味を持つ。こちらが質問に十分に答えられない場面もあり、自身の勉強不足を痛感させられた。
今回、広い文化の中で書法という文化を理解し、自らの体験に基づいて第三者に発信するという目標は十分に達成されたと思う。しかしながら、短い期間に多くの情報を詰め込んだので、受講生たちはまだまだ消化しきれていないことが多いと思う。今後、本を読み、博物館に足を運び、書を鑑賞する機会に出合ったときに、今回の中国での体験を思い出し、さらに学習を進めていってもらいたい。

7.次年度以降の課題

今回同様、事前の下見を徹底すること。